

インドネシアの民族服飾と その背景について

田 中 美 智

A Brief Note on the Indonesian Traditional Costumes and Their Historical Background

Michi Tanaka

I はじめに

現在、一般に私達が着用している服装は、近代において世界の指導的な立場であった欧米先進国の服装——いわゆる洋服である。

いまや洋服は共用着となり、全世界の共通服装となっている。確固たる国際服としての地位を占めていると思われる。

しかし、一方世界の各民族は、独自の服装を有しており、様々な事情により着用の頻度は異なっているものの、洋服と併用して民族服を着用しているのが現状である。

いまさら述べることもないが、民族とは同じ土地に起こり、同じ言語、宗教を持つ、同じ人種の集まりのことであり、従って民族服飾とは国際的共用服飾に対して、その民族固有の服飾のことである。

民族服飾はその民族の性質、能力、気質などの影響を受ける。そして気候風土の特色の職能的特性も反映している。さらに民族の歴史や伝統、政治、経済、宗教などの文化的特性から大きい影響を与えられる。以上のように民族服飾は、その民族の自然環

境、社会環境、文化環境の結晶であるわけである。それゆえに民族服飾を探ぐることは、各民族の生活全般を探ぐることだと考えられる。

現代社会の中で、一般の暮らしの中に生きている民族服飾はだんだん数少なくなってきたが、今回は1979年春、研修旅行の機会を得たインドネシアについて、今なお生活に密着して着用されている民族服飾を、その背景を調べることにより考察してみたいと思う。

II インドネシアのあらまし

1. 自然について

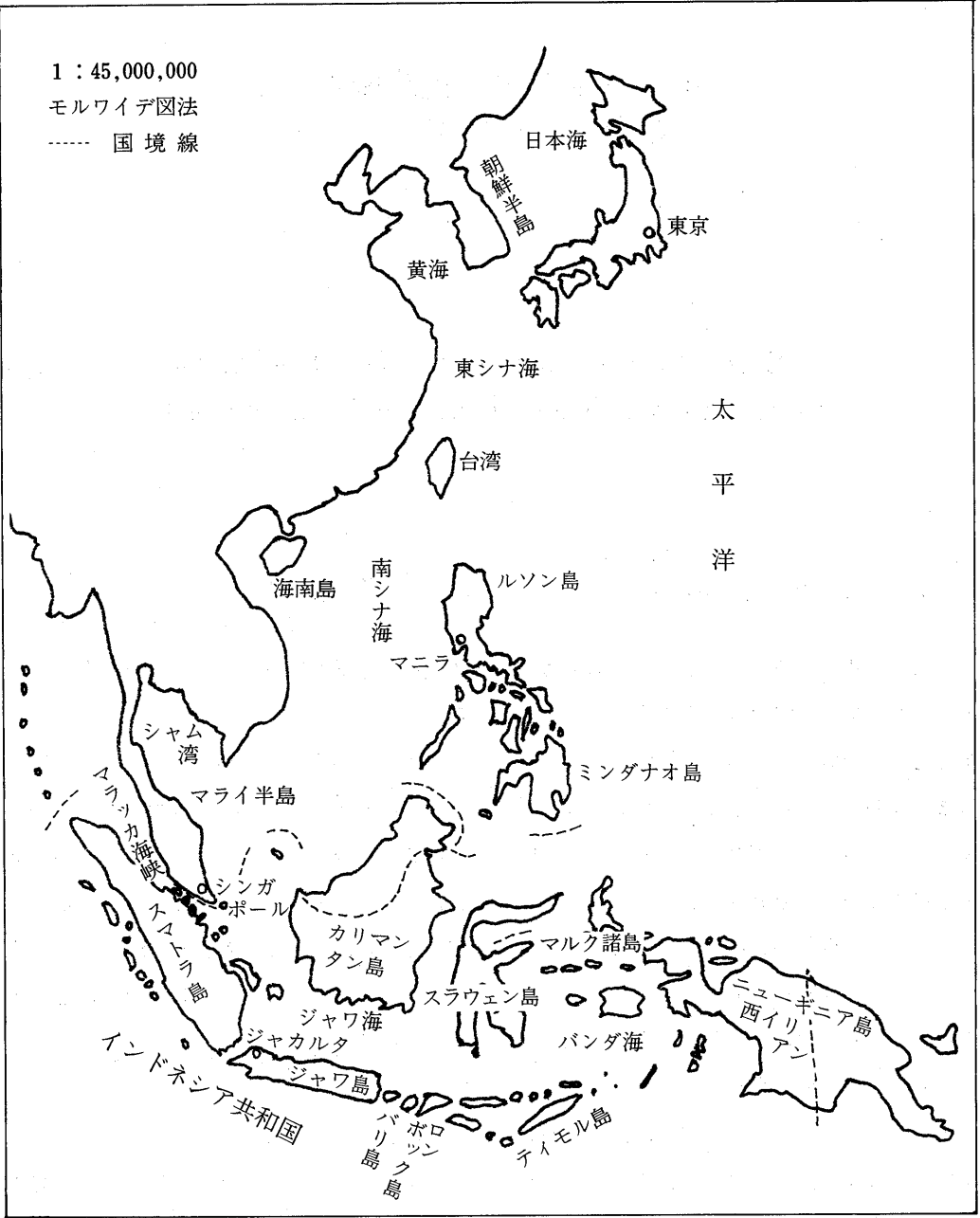
インドネシアの領域は、赤道をはさんで北部は北緯6°、南部は南緯11°の範囲にあるため熱帯気候に属している。また西方は東経95°、東方は141°まで広がっているため、国土はほぼ東西4800km、南北1600kmにまたがる広大な範囲にわたっている。

全体としてみると、アジア大陸の東南部を占め、オーストラリアとの中間をみたしており、また太平洋とインド洋とをへだてて、重要な地理的位置を占めている。

1 : 45,000,000

モルワイデ図法

----- 国境線



アメリカ合衆国本土に匹敵する、面積の広い海域にちらばっている大小3000ほどの島々からなっている。その主なものは、スマトラ、ジャワ、カリマンタン(ボルネオ)、スラウェシ(セレベス)、イリアン=ジャヤの五大島、さらにヌサ=トゥンガラ(小スンダ列島ともいう、バリ、ロンボック島など)、マルク(モルカ)諸島などである。

インドネシアの国土面積は、約202km²(昭和52年現在)であり、日本のほぼ5倍にあたる。インドネシアの地形は変化に富み、高山・火山があり、海岸にはマングローブの海岸からさんご礁海岸までである。特に山地がいたるところに点在しており、少しばかりの距離で熱帯でありながら容易に涼しい気候の山地に達する。

気候は熱帯的な高温多雨型である。一年中25℃以上の高温で、季節的な気温の差異は殆んどない。しかし降水量に多小の変化があり、各島によって若干異なるが、雨期は一般的には、12月から3月までである。南シナ海の西風モンスーンの影響によって雨期となる。反対に乾期は、オーストラリアからの東風モンスーンによるもので、6月から10月にかけてが一般的となっている。

2. 政治・経済・社会について

インドネシアは共和国であり、その主権は国民にある。政治形態は5つの基本大原則、Panca Sila に基づいている。その第1は、崇高なる神という考えに従って、国民の宗教に対して寛容であること。第2は、文化的な人道主義、第3は、インドネシアの民族主義、第4は、慣習法（アダト Adat）を組み入れた民主主義、第5は、国民の権利と社会福祉をスローガンに掲げる社会主義である。

インドネシアの政治基本方針は、“Gotong Royong”——必要な時には互いに助け合うこと、“Musyawarah”——大部分の意見が一致するまで国民の代表者たちが議論をたたかわせ、審議を続ける民主主義である。インドネシアの固有の考え方に基づいているのが法律、憲法となっている。

経済は、その豊富な天然資源に支えられている。特に多大な恵みをもたらしているのは原油の産出である。1966年からインドネシア政府は各方面と協力して、インドネシア経済の安定策を講じている。一方、資源生産を促進する工場を増設することにより、さらに外貨獲得の増大を望んでいる。

インドネシアで最初に行なわれた5ヶ年計画は、食料、衣料品、住宅問題、雇用問題など、

国民の生活に関する基本的なことの改善を目的とした政策であった。現在インドネシアは外国の資本と技術を獲得して、技術力と経営力を備えている。

主産業は農業である。ジャワ島では面積の90%が農業用地である。国内消費向けの主な生産物は米であるが、他にトウモロコシ、大豆、ピーナツ、ジャガイモ、そして豊かな種類の果樹類がある。輸出用として茶、コーヒー、タバコ、サトウキビ、ゴム、キニーネの原料であるキナの皮を生産している。工業では農業機器、刃物類、藤製品、織物、染色製品などがインドネシアの伝統的な主製品となっていたが、近年自動車の国内生産と、化学工業も操業開始され、西ジャワでは大規模な製鉄、製鋼所を建設し工業化が進んでいる。

3. 歴史・文化について

紀元前300～200年頃移住定着したインドネシア人は、各地で水稲・陸稲耕作を行い、原始共同体的な生活を営んでいた。彼らはその共同体生活のすべての面において、精霊や超自然的存在に対する信仰によって規制されていた。規制は伝統的に継承され、共同体を律するAdatとなっていた。これらの共同体社会は、紀元前2世紀頃から貿易を通じ、除々に南インドからヒンドゥー・仏教文化を受け入れ、ほぼ15世紀までこのヒンドゥー・仏教文化の影響下にあった。

その間マジャパイト国など、いまのインドネシア共和国の全領域に大きな影響を及ぼした強大な王国も存在したが、これら諸王国の支配は、従来の共同体社会にその生活圏を拡大させる等の影響のほかに、王権や官僚制、カースト制、それから必然的に生じる貴族制などの新しい社会的、政治的要素を、そして

日本・インドネシア対比略年表

インドネシア		日 本	
BC		無土器代	
ACO	*原マライ人 *新マライ人	縄時代	500縄文文化始まり 200弥生文化始まり
100	78ジャワ紀元元年・伝説上ジャワ建国	弥生時代	
200			239邪馬台国女王卑弥呼, 魏に使者派遣
300	*西ジャワにタルマ国おこる	古墳時代	
400			562任那日本府新羅に滅ぼされる
500		飛鳥時代	593聖徳太子摂政となる (~622) 645大化の改新始まる 672壬申の乱
600			710平城京に遷都 794平安京に遷都
700	752シャイレンドラ朝 (~850 頃) 成立	奈良時代	
800	850頃ボロブドゥール造営		
900		平安時代	894遣唐使派遣廃止 935平将門の乱 (~40) *摂関政治全盛期
1000	*برانパンアンに寺院の建立 929クディク王国おこる *インドの香料郡島貿易の発展		
1100			1086白河上皇, 院政開始 1159平清盛, 大政大臣となる
1200	1222シンガサリ朝 (~92) 成立 1293マジャパイト国 (~1520) 建立	鎌倉時代	1165源頼朝, 征夷大将軍となる 1274文永の役 } 元寇 1281弘安の役 } 1333鎌倉幕府滅亡
1300	*ガジャ・マダ時代		1392南北朝の合一 1467応仁の乱 (~77) *下剋上の風潮
1400		室町時代	1573足利幕府滅亡
1500	*イスラム化進む		1585豊臣秀吉, 関白となる 1603徳川家康, 征夷大将軍となる *海外進出, ヨーロッパ人渡来盛ん
1600	1596オランダ, ハウトマン船隊ジャワ到着 1602連合東インド会社 (VOC) 設立	安永時代	
1700	1713ジャワ東部内乱 (~19) 1717第2次ジャワ継承戦争 1799VOC解散	江戸時代	1717京保の改革 1787寛政の改革 *百姓一揆, うちこわし起こる
1800	1825ジャワ戦争 (~30) 1830強制栽培政策実施 1870土地法制定		1853ペリー浦賀入港 1859安政の大獄 1867王政復古
1900	1873アチエー戦争 1949オランダから独立 1950インドネシア共和国発足 1967ASEAN結成	明治	1868五箇条の御誓文 1904日露戦争 (~05)
		大正	1914第一次世界大戦
		昭和	1941大太平洋戦争 (~45)

新しい宗教的原理をもたらした。今日みられるマハーバーラタやラーマーヤナを主題にしたワヤン劇（影絵人形芝居）や舞踊など、(写真1, 2参照) またボロブドゥールの仏教遺蹟やプランバナンのヒンドゥー遺蹟（写真3, 4参照）などは、この時期のヒンドゥー・仏教文化の影響を直接物語っている。



写真1 ワヤン劇の楽士

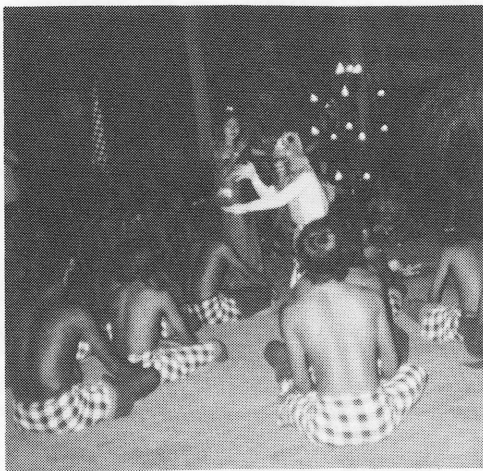


写真2 ケチャックダンス

しかしこのヒンドゥー・仏教文化の影響も、従来の共同体の慣習法を破壊したわけではない。ヒンドゥー教の多神的信仰は、旧来の精霊信仰と混淆され、非常にインドネシア的なものに変容された。そこでは依然として精霊信仰は生きのび、慣習法も若干のヒンドゥー



写真3 ボロブドゥール・仏教遺蹟



写真4 プランバナンのヒンドゥー遺蹟

的変更をとめないながらも、旧来の原則を維持しつづけた。

ついでインドネシアには、インドのグジャラート地方などの商人たちによって、イスラム教がもたらされた。イスラム教は11世紀頃からスマトラを起点に、徐々にその勢力を増

大し、15世紀頃ピークに達した。その後も浸透は続き、現在ではヒンドゥー・仏教徒のバリ人、キリスト教徒のトバ=バタック人・ミナハサ人・トラジャ人・アンボン人などを除く、ほぼ90%のインドネシア人がイスラム教徒だといわれる。

イスラム的社会規範は、その地方的ひろがりのなかで、各地において旧来の慣習法秩序といくたの対立、抗争を繰り返しながら、終局的にはそれと妥協、融合していったものである。

16世紀はじめにポルトガル人が交易を求めて来航したのを皮切りにして、スペイン、イギリス、オランダが進出してきた。オランダの東インド会社は、1602年バタビアに作られ、それ以後非常にゆっくと力を増していった。オランダの植民地支配はどちらかといえば、インドネシア社会に西欧文化をもたらすことに積極的ではなかったが、20世紀に入るとインドネシア人の側において、積極的に摂取する努力がなされた。こうして摂取された西欧民主主義や共産主義の思想は、オランダ植民地支配に抗する民族独立運動への有力な武器とされた。これら西欧思想の摂取は単なる移入ではなく、民族独立運動の展開の過程において、インドネシア伝統文化と融合されていた。

新しい文化の波及がインドネシア社会における変化の要素であるのに対し、慣習法はその接続の要素である。慣習法は、古来インドネシア人が地域的な共同体を営むうえで、各人がそれに律せられるべき生活規範であった。それは根本的にはかれらの宇宙・自然観に発するものであって、それよりうみ出された宗教・社会的観念にもとづいて、各人の属する

共同体が構成され、各人の自然や他人への対応または属する共同体へのそれを規定するものであった。これは多様な外来文化の摂取の過程においても、根本的な点においては、さしたる変化をうけることはなかった。

III インドネシアの現在の一般的服装

世界各国と同様にインドネシアにおいても近代文明の影響を受けて、都市部や子供社会では洋装化の傾向は見られるが、反面従来のは服装が生活の中に根強く生きている。冠婚葬祭などの特別な時や、公式の場での着用に限らず、毎日の暮らしや労働の際に着用される一般的服装について述べると、次の様なものがある。

1. 男性の服装 (写真5, 6 参照)

(1) 上 衣

クメジャ (Kemeja) とジャス (Jas) がある。Kemeja はYシャツ、開衿シャツのこと



写真5 Yogyakartaの王宮の従僕

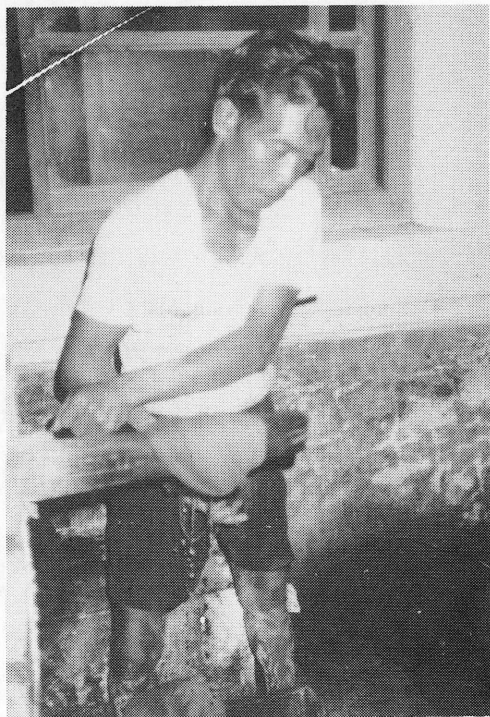


写真6 紡績工場で糸を染める男性

をいい、ほとんどの素材は木綿である。Jas はジャケット類や背広の上着など総称している。最近では木綿の代わりに化学繊維が用いられる。

(2) 下衣

チュラナ (Celana)、チュラナ・ダラム (Celana-dalam)、サルン (Sarung) などがあある。Celana は長ズボンのことである。Celana-dalam は半ズボンやパンツ類の呼称である。Sarung は約巾105~110cm、長さ180~225cmの布の両端を縫い合わせた筒状のものであり、下半身を足首まで覆う腰衣のことである。Sarung にはジャワ更紗 (バティック Batik) のものと、格子縞などの織物のものがあるが、男性は普通、カインプレカット (Kain Plekat) と呼ばれる格子縞 Sarung を着用する。

男性の Sarung の着方は、輪の中に身体を入れて、両端をそれぞれの手に握って好みの

長さにし、右端を腰の左側面にきっちり合わせ、その上に左側の布を腹部の中央まで重ねて、丈のあまった分をウエストのところで外側にたくしこんでしっかりとめる。その上から洋風のベルトを締める。

(3) 服飾品

カイン・クバラ (Kain Kepala) は、90cm 四方の風呂敷大の布に Batik 染を施したもので、ターバンのように頭に巻いたり、結んだりする。イクット・スパロン (Iket Separon) は、斜めに半分にかたれた三角の布で、同じく頭を包む。ブランコン (Bulankong) は、Kain Kepala を帽子のように形づくったものである。これには Yogyakarta スタイルと Surakarta スタイルがあり、それぞれの地域の upper class の人々の間で利用されている。一般的にはソンコ (Songkok) またはペチ (Peti) という、黒いビロード製の縁なしのトルコ帽のような帽子がある。ほかに、コピア (Kopiah) という、イスラム教徒だけがかぶる白い丸帽がある。

はきものはゴムぞうりか比較的多いが、はだしの場合もある。

2. 女性の服装 (写真7, 8参照)

(1) 上衣

クバヤ (Kebaya) とバジュ (Baju) がある。Kebaya は長袖の細い筒袖の半襦袢のようなもので、オーバーブラウス風に腰衣の上に着用する。Baju はジャケット類のことをいう。Baju には二種類あり、バジュ・クルン (Baju Kurung) は丈の長い前の開いていない Baju のことである。バジュ・パジャン (Baju Panjang) は前の開いている Baju のことである。これら上衣はデザインも豊富であり、素材もバラエティに富んでいる。

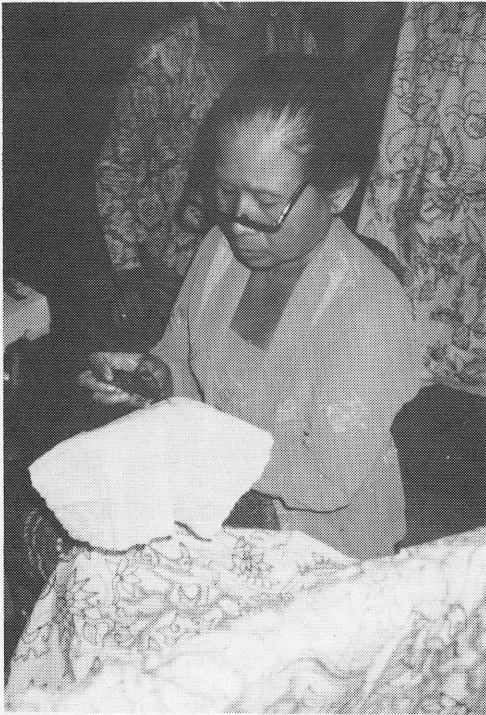


写真7 Batik工場でろう描きする女性



写真8 農作業する女性

(2) 下衣

カイン・パンジャン(Kain Panjang)とサルン(Sarung)がある。Kain Panjangは約巾80～

110cm、長さ225～320cmの一枚の布で全面に Batik 染が施されている。Sarungと同様に下半身を覆うものであるが、筒の様に縫い合わされず長方形の布である。今日においても女性の間では広く着用されているが、男性の場合は特別な儀式の時のみ着用されている。Sarungは男性Sarungと同じく腰から下にはく筒状の布であるが、女性の場合は一般に Batik 染のものが着用される。但し、中部ジャワの一部では格子縞 Sarung が用いられている。

女性の Sarung の着方は、腰にぴったり巻いて、あまった部分の一つの襷にして、普通右側の腰のところへもっていく。その上を次に説明する Stagen やベルトで締める。

(3) 服飾品

スタゲン (Stagen) は木綿の芯地のような巾20cm位の長い帯で、これを幾重にも固く巻き腰衣をおさえる。クンバン (Kemban) は Stagen の上に胸当てとして巻く。これには絞り染めや絹ものもあるが、Batik の手描きのものが最上等とされている。

スレダン (Seledang) は巾45cm、長さ225cmほどの長方形の布で、肩掛に用いられる。盛装用には少し短めの布を使用する。装飾的、儀礼的なものとして、または日常生活では赤ん坊を抱きかかえたり、品物をいれて運ぶなど実用的目的にも使われる。

耳輪(スバン Subang)、腕輪(グラン Gelang) 指輪(チンチン Cincin)をつけることも一般的である。これらアクセサリは金製品が好まれるが、個人的財産の象徴のためや、魔よけの目的のために重要な意義をもつものである。髪はうしろで束ねて髷にし、小さいくしや花をさすこともある。

はきものは最近サンダルをはくことが普及してきたが、一般にははだしが習慣であった。

IV インドネシアの民族服飾の経緯

1. 形態・着装の変化

最も原始的なものとしては、男性は禪、女性は腰みのをつけるという形式であろう。これは熱帯的な風土的条件から生まれたものである。そしてこの形式の進化したものが、いわゆる Sarung となり、特に熱帯低地地域に最も適した衣服の原型となるのである。

機械の技術が伝わる以前の原始的腰着としては、木の葉の束などから作られたものであり、ニューギニアの未開部族やスマトラ西海岸の島民にその例がみられる。スマトラ西岸のメンタワイ諸島では、芭蕉の葉を結び合わせたもの、またエンガノ島ではシュロの繊維をガラス玉で貫ぬいた紐で結び合わせたものが使われる。これが進歩したものが繊維で編んだ腰着である。

ボルネオのプナン族は藤 (Bottan) の茎から Sarung 的なものを編んでいる。このほか主にクワ科の植物をたたいて軟かくし、これから上衣や腰布を作る技術もあるが、これは今もインドネシアの未開部族の間に名残りをとどめており、セレベスのトラジャ族などに著しい。

ジャワでは下穿のことをカイン (Kain) といって Sarung の下につけるが、Sarung は Kain が発達して外衣となったもので、さらに格式ある Kain Pandjang に発展している。

ドドト (Dodot) という Kain Pandjang より、さらに大きく巾約 210cm、長さ約 400cm で 2-4 枚の布を縫い合わせた腰衣がある。これは王候・王妃の衣服、王宮内における貴

族階級の正装であり、花嫁、花婿、王宮専属の舞姫たちの盛装のための衣裳であったが、今日殆んど使用されていない。

反対に Kain Panjang は、女性の服装の中心となるもので、最も普遍的な礼にかなった日常着の地位を保持しており、公式の服装には欠かすことは出来ないものである。

男女共通してこれら Sarung や Kain Pandjang を着用することは、階級の如何を問わず民族的慣習となっているが、その模様や着用方法は、地域や社会階層、男女差によって異っている。

今日では写真 6 にみられるように男性は労働の際、半ズボンとシャツといった服装が多くなったが、Sarung (あるいは Kain Panjang) を持たないものはない。自分の家にいる時、普段着としては Sarung をつけているのである。これは大変便利なもので涼しい上に、寝る時など頭からすっぽりかぶって蚊帳の代用にしたりすることもできる。また日に何回となく水浴 (マンデー mandi) する習慣があるが、この習慣の関係からも Sarung, Kain Panjang はインドネシア人にとって大変適した服装といえる。

女性の特殊服飾として Selendang がある。一方の肩から他方の腋の下をくぐらせて斜めに掛けて用いる。もともと胸に巻く Kemban から発達したもので、次第に肩に掛ける装飾用としての性質を帯びるようになったといわれる。これはインドからの影響がうかがえる。現在では大変実用的な目的として、外出用の肩掛、スカーフ、寒いときの保温用、炎天下の防暑に供されている。また買物時の手さげ代りにしたり、赤ん坊を抱く時にも使用され、女性にとってなかなか重宝なものである。公



写真9 100年前の女性の服装
(C.H.シュトラッツ著, 女体美と衣服より)

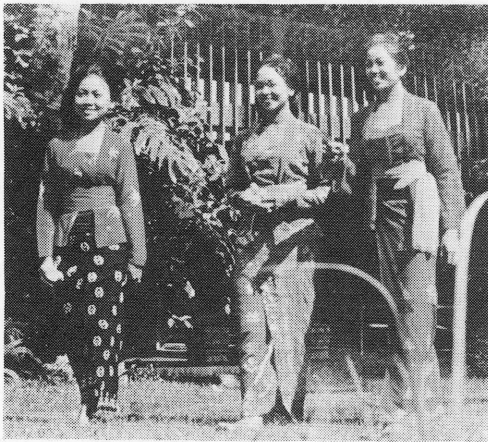


写真10 現在の女性の服装

式の服装には欠かすことはできない。

原始民族の褌、腰みの着用以来、上半身には上衣をつけないのが伝統であり、Yogyakarta, Sarakarta の宮廷でも、貴人の前に出る時は上半身裸体、はだしというのが礼儀とされていた。16世紀以後ヨーロッパ人との接触が多くなってからは、上半身を露出したままの姿は少なくなり、今ではシャツや上衣を着用するようになった。これら上衣の形態には、ヨーロッパ的または中国的影響がみられる。女性の上衣の場合、特にデザインも工夫され、生地は木綿、絹のボイル、シフォン、化学繊維などいろいろあり、盛装用として絹

にしゅうを施したもの、レースなどもある。

2. Batikについて

Batik の起源については、種々の見解がある。原始的ろう染方法は、西暦紀元前後インド文化がここに伝わる以前から存在したという説もあるが、11・12世紀頃インドから伝えられ、その後独自の発展をみたとの説が有力である。

このころジャワはクディク王国、マジャパイ国の統治時代であったため、Batik は王候貴族の子女のみに許された高級手芸として発達した。彼女たちは高価な材料と多くの月日を費やし、Batik 染に精魂を傾けた。そして王宮内で次第に精巧さと意匠に洗練の度を加え、巧緻を極めたものに発展していった。

16世紀末頃になると、Batik は一般庶民の間にも浸透していった。インドからは大量の綿製衣料・白布が輸入され、密ろうもチモール島のほか、スマトラの Palembang, ジャワの Jakarta (現在の Jakarta) などから多量に供給され、比較的低価格で原料の入手が可能となり、Batik の一般化となったと考えられる。そして17世紀初め、ソガ (Soga) 染料が発見され、今までの藍と白の配色のものから Soga の茶色を加えた典型的 Batik の確立となった。

英国のジャワ支配下の頃 (1811~1816年)、今日の Batik 用原布のキャンブリックが輸入されることとなった。キャンブリック使用によって、Batik の特色をより効果的なものとした。また、Canting によるろう手描作業であった Batik は、1860年頃 Cap の発明により、Batik 染を能率的にさせた。Cap でろうを捺押する方法によると、生産日数が短縮され、以前より多量に生産可能となった。

Batik の専門製造業社が生まれ、手工業的工場生産がされるようになり、工場生産化によって生産は順調にのび、国内使用量、輸出量は増加した。しかし旧来の技芸や伝統は、重視された。

今世紀に入り天然染料から化学染料にとって代われ、その結果第一次大戦後は今までにない最高の生産高となったが、第二次大戦頃には原料不足などから生産は半減した。その後も Batik 工業はしばらく低迷状態が続いた。インドネシア政府は Batik 工業の育成保護の施策を打ち出し、業界もこれに呼応して Batik 産業の再建にあたった。

現在 Batik はインドネシアの民族服飾に利用されるばかりでなく、男性のアロハシャツ、ネクタイ、女性のブラウス、スカート、ワンピースなどをはじめとしてテーブル掛け、壁掛け、ベッドカバーなどのインテリア製品にまで巾広く利用されている。

Batik は時代の流れと共に進展し、永い間インドネシア人に愛し続けられてきた。今日なおも生活の中に生き続ける民族服飾の中に、同じく生活に密着した Batik を見ることが出来る。インドネシアで民族服飾が民衆に着用される理由の一つに、Batik の伝統的、すぐれた染色工芸の存在を強く感じる。Batik のすぐれた技術は、インドネシアの美しい衣裳として活用されているわけである。

V インドネシアに残る民族服飾の意味すること

インドネシアの首都ジャカルタでは、高層ビルが建ち並び、道路は広く舗装されている。政治的、行政的中心であり、現代のインドネシアの全体的状況がこの町に集約されている。

人々も地方からこの町に多勢集まり、あふれ返っている。日々刻々と成長している町である。しかしこの町で生活している人々の暮らし向きは、町の日々を見る変貌とは、にてもつかぬものである。

インドネシア人の最大の特徴の一つは、習慣を重じる点である。すべての生活習慣は、よほどの事が無い限り変わることなく、ある所では儀礼的とまでなっている。このようなインドネシア人の民族性を背景にして、衣生活面でも旧態依然の状況が不自然にも考えられず温存されているのである。

全体的生活内容が変わらないのならば、衣生活においても特に変わることもなく、外での生活はともかく家庭内では、いわゆる民族服飾が着用されることが多いわけである。かれらにとっては意識することなく、ただ今まで通りの服装をしている方がかえって生活のリズムが乱れないのである。

旧態を温存しようという心理は、すべて保守的な考え方から出発する。まず私達の実生活の中では、慣れの安全性ということが認められる。古くから伝承してきた物事は、確実に効果があつて間違いないという、信頼感を覚えるものである。ところが従来と異った新しい物事に対しては、未経験の不安が伴ない、警戒心も湧いて、一応その採用をためらう心理が生れる。そこで新しい変化は回避しようとする意識がはたらいで、これまでの物事をそのまま保ちつづけていこうということになる。

服飾においてもこれまで長く着なれたもの、見なれたものへの信頼感、安心感、ひいては愛着を覚えて、その伝統を保持しようとする傾向が強いはたらくのである。また、旧来の

伝統はわれわれの先人、祖先の実践してきた物事であり、伝承されたその遺風は、その民族集団を象徴する特性をもっているものとして、尊敬しようとする態度をとるようになる。先人や祖先の崇拜、その業績の礼讃、その実践効果の再現というような気持がおのずから湧いてくることになる。これらの心理的な誘因に基づいて、伝統を受けつぎ旧態を温存することになるのである。

VI ま と め

服飾は自然環境とくに気候風土に対応して、人体の要求する服飾が自然のなりゆきで作られ出される。また社会環境に順応するために、服飾がおのずから出来上ってくるという生れ方をする。

発生したばかりの服飾は、人為的な作意が加わらず、簡単でしかも必要な素質や機能だけは備えられているという、先天的な性格をもっているのが特色である。

自然発生によって芽ばえた服飾は、しだいに発育成長していく。政治、経済、宗教、思潮、科学、戦争、平和などが直接に間接に服飾の展開変容に関係し、大きい影響を及ぼすのである。

今回私が垣間見た現在のインドネシアの服飾は、インドネシア民族服飾の生態的変遷の一段階を観察したにすぎず、過去における資料ならびに文献などは、極わずか調べることが出来ただけである。ただこの国の民族服飾の形態変化は、はなはだ少なく、その少ない変化は大変遅い歩みである。

民族服飾の変遷において最大のものは、上衣を着用することになった点であるが、これは16世紀頃からのヨーロッパ人との接触からで

あって、統一して上衣着用が徹底されたのは、スカルノ時代に入ってからといわれている。民族服飾が停滞、定着する理由はいろいろ挙げられるが、この国の場合は今残っている民族服飾が、この自然環境に適し、生活特に個人生活にふさわしく、インドネシア人の民族性に支えられている。

以上、種々の背景を通して今日のインドネシア民族服飾について考察を試みたが、今後さらに生活との関わりから考察したいと思う。

終りに、本研究に対し終始ご懇切なご指導を賜りました、文化女子大学 家政学部 遠藤武教授ならびに本学 教育学部 額嶺千代教授に深謝申し上げます。また、資料ご紹介、ご示唆をいただきました、財団法人東洋文庫 ユネスコ東アジア文化研究センター調査資料室 生田滋室長に厚く御礼申し上げます。

引用文献

- (1) 小川安朗：民族服飾の生態，東京書籍株式会社，P.25～50，82～103，127～131，167～172，1979.
- (2) 稲垣和子：ジャワバティック，源流社，P.139～144，155～160，1978.
- (3) 別枝篤彦：服装の地理，玉川大学出版部，P.165～170，1975.
- (4) 田中薫，田中千代：原色世界衣服大図鑑，保育社，P.38，1971.
- (5) C・H・シュトラッツ：女体美と衣服，刀江書院，P.259～273，1970.
- (6) 和田久徳ほか：世界現代史5 東南アジア現代史I，山川出版社，P.54～60，1977.
- (7) 渡辺光編：世界地理3 東南アジア，朝倉書店，P.111～113，1976.